

共生社会の実現に向けて / 地球社会と私たち(取手市立戸頭中学校 土屋 啓一)

【実践者】

氏名	土屋 啓一	学校名	茨城県 取手市立戸頭中学校
担当教科等	1年生 総合的な学習 3年生 社会科	対象学年(人数)	1学年(79名) 3学年(81名)
実践年月日もしくは期間(時数)	R5年9月～12月 1年生(7時間) 3年生(5時間)		

【実践概要】

1. 実践する教科・領域: 1年生 総合的な学習の時間 3年生 社会科
2. 単元(活動)名: 1年生 共生社会の実現に向けて 3年生 地球社会と私たち など
<p>3. 授業テーマ(タイトル)と単元目標</p> <p>授業テーマ</p> <p>1年生「共生社会の実現に向けて、自分たちができることは何ですか」</p> <p>3年生「なぜ日本は海外に支援する必要があるのか」</p> <p>単元目標</p> <p>1年生(総合的な学習の時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福祉に関する探究的な学習を通して、共生社会の実現に向けて必要な知識及び技能を身に付けることができる。(知識及び技能) ・高齢者福祉や障害者福祉について、自分で課題を見つけ、情報を集め、整理・分析することで、共生社会の実現に向けて自分たちができることを表現することができる。(思考力、判断力、表現力) ・福祉に関する探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、共生社会の実現に向けて積極的に社会に参画しようとする態度を養う。(学びに向かう力、人間性等) <p>3年生(社会科)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界平和の実現と人類の福祉の増大のためには、国際協調の観点から、各国民の相互理解と協力が大切であることを理解できる。(知識及び技能) ・対立と合意、効率と公正、協調、持続可能性などに着目して、日本国憲法の平和主義を基に、我が国の安全と防衛、国際貢献を含む国際社会における我が国の役割について多面的・多角的に考察、構想し、表現することができる。(思考力、判断力、表現力) ・世界平和と人類の福祉の増大について、現代社会に見られる課題の解決に向けて自らの学習を振り返りながら粘り強く取り組み、主体的に社会に関わる態度を育てる。 <p>関連する学習指導要領上の目標</p> <p>1年生(総合的な学習の時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習の良さを理解するようにする。 ・実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。 ・探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編 第2章第1節

3年生（社会科）

・現実の国際社会などに関する理解を基に考察、構想し、表現することができる適切な問いを設け、それらの課題を追究したり解決したりする活動を通して、世界平和と人類の福祉の増大のために熱意と協力の態度を育成する。

中学校学習指導要領解説社会編 第2章 D 私たちと国際社会の諸課題(1)世界平和と人類の福祉の増大

4. 単元の評価規準 (1年生)	①知識及び技能	共生社会の実現に向けて、様々な人たちが関わっていることを理解している。
	②思考力、判断力、表現力等	共生社会の実現に向けて、自分たちができそうなことを考え、選択している。
	③学びに向かう力、人間性等	福祉やパラスポーツに関わる人たちと交流することで、共生社会の実現に向けて自分たちができることを他者に伝えようとする。
(3年生)	①知識及び技能	地球環境、資源・エネルギー、貧困などの課題の解決のために経済的、技術的な協力が大切であることを理解している。
	②思考力、判断力、表現力等	対立と合意、効率と公正、協調、持続可能性などに着目して、日本国憲法の平和主義を基に、我が国の安全と防衛、国際貢献を含む国際社会における我が国の役割について多面的・多角的に考察、構想し、表現している。
	③学びに向かう力、人間性等	世界平和と人類の福祉の増大について、現代社会に見られる課題の解決に向けて自らの学習を振り返りながら粘り強く取り組み、主体的に社会に関わろうとしている。

5. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、指導観)	<p>【単元設定の理由】</p> <p>1年生 中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編では、「各学校において定める目標及び内容については、日常生活や社会との関りを重視すること」と記されている。取手市では、障害のある方が暮らしやすい地域社会(共生社会)の実現を目指す「あいサポート運動」を実施しているなど、障害者や高齢者への福祉に力を入れている。少子高齢社会を迎え、高齢者に対する福祉の充実が欠かせない。また高齢者だけでなく障害のある方や外国人、性的マイノリティなど多様性を尊重した共生社会の実現は、世界共通の目標となっていることから本単元を設定した。</p> <p>3年生 中学校学習指導要領解説社会編では、本単元のねらいとして、「国際社会において国家が互いに尊重し協力し合うために大切なものは何か、世界平和と人類の福祉の増大のために、世界の国々ではどのような協力が行われているか、我が国ではどのような協力を行っているのか、地球上にはどのような問題が存在し、その解決に向けて国際社会はどのような取組を行っているのか、今後どのようなことができるか、といった現実の国際社会などに関する理解を基に考察、構想し、表現することができる適切な問いを設け、それらの課題を追究したり解決したりする活動を通して、世界平和と人類の福祉の増大のために熱意と協力の態度を育成する」としている。本単元は、入試前の単元ということもあり、教科書に掲載されている国際支援の事例や国際連合の機関についての学習に終始してしまうことが多く、国際支援の意義や重要性について、深く考察、構想することが時間的に難しい問題がある。そこで早い時期から計画的に「ラオス学」という単元を設定し、ラオスの事例を通して、国際支援のあり方について考えさせるために本単元を設定した。</p>
	<p>【単元の意義】</p> <p>1年生 本校の第1学年は、例年、取手市社会福祉協議会と連携をして障害のある方との卓球バレーの実演や講演を実践している。また第2学年の職場体験学習では、福祉施設を希望する生徒も多いことや吹奏楽部が近隣の福祉施設でコンサートを行っている。9月には本市出身で東京パラリンピックゴールボール代表の方を招いて、体験学習を含めた講演会を実施した。本市でも少子高齢社会が進行しており、地域の団地は高齢者の割合が非常に高い。福祉教育を総合的な学習の時間に位置付けることは、取手市の福祉や今日的な課題、生徒の思いやりの心の育成など、学習する意義はとて大きい。</p> <p>3年生 本校では第3学年で平和教育を進めている。具体的には東日本大震災の体験者によるオンライン講習や原爆被災者による講演会、また海外で医療支援活動をしているNGO</p>

による「地球のステージ」を毎年開催している。2022年のウクライナ侵攻、2023年のトルコ地震やイスラエルガザ地区の紛争など、平和を脅かす出来事が繰り返し頻発し、国際支援の重要性はより一層高まってきた。3学年の生徒も関心が高く、豊富な知識を有している者もいる。しかしニュースやインターネットで得た情報だけでは、現実性に乏しく、実感が伴わないこともある。そこで実際に国際支援に携わっている方や外国人との交流をしたり、今回のラオス教師海外研修に参加した内容を授業で伝えたりすることで、国際支援の意義や在り方について考える意義は大きいと考える。

【児童／生徒観】

1年生

生徒数は79名で1つの小学校から持ち上がってきている一小一中の学区である。外国籍、または保護者が外国人という生徒も複数いる。海外旅行に行ったことがある生徒は、外国籍の生徒を除くと、2～3名程度である。小学校の総合的な学習の時間では、主に地域の環境についての学習をしている。まだ幼さが残るが、学年内の友人関係は比較的安定しており、課題に対しても前向きに取り組む生徒が多い。

3年生

生徒数は81名で非常に活力のある生徒達である。外国籍の生徒は3～4名程度であるが、日本語に不自由しておらず、学習にも意欲的に取り組んでいる。体育祭や文化祭など学校行事においても率先して働き、リーダーシップを発揮し、活力ある学校づくりに貢献した。社会科においては、地理、歴史、公民の3分野を学習することで知識が豊富になり、国際関係の学習にも関心が高まってきている。英語のスピーチコンテストに挑戦したり、外国人と積極的にコミュニケーションをとろうとしたりする生徒も多く、将来は外国で働きたいと考えている生徒もいる。

【指導観】

1年生

学区には大きな団地を抱えており、高齢化が進んでいる地域であるが、核家族の家庭が多く、福祉に関して関心が高いとはいえない。また福祉施設に訪問したり、実際に障害のある方と交流する機会を持つたりする機会がない生徒が大半である。そこで単元の導入として、街の中でバリアフリーが必要な箇所を話し合わせたり、市立図書館の書籍を利用して、福祉に関する調べ学習を実施して、各自でレポートを作成させたりした。9月には、市内出身の東京パラリンピック選手によるゴールボール体験会を実施した。その後パラスポーツについてスライドにまとめ、グループ内で発表した。本時では、ラオス国内にも多くの障害者がいること、支援が十分でないこと、日本人が支援に携わっていることなど、福祉教育と国際理解教育を組み合わせた授業を構想している。本時では ADDP(アジアの障害者活動を支援する会)の中村由希氏と東京パラリンピックに陸上選手として参加したラオス人のケン・テップティーダ選手に講演をいただく。このような活動を通じて、障害者福祉が日本だけではなく、世界で重要だということや日本人が海外で障害者福祉に携わっていることを生徒に認識させたいと考えている。

3年生

歴史的分野では、日本が中国や朝鮮半島、東南アジアに侵攻し、植民地政策を進めようとした結果、太平洋戦争で敗北し、苦難の歴史が始まったことを学習した。特に原子爆弾の投下については、広島死没者追悼平和祈念館より原爆体験伝承者を派遣してもらい、講演会を開催するなど、原爆投下が引き起こす残酷さや、その後の国際的な支援が復興に結びついたことなどを知ることで、平和についての認識を深めてきた。また11月には、紛争地で医療支援活動を行う桑山紀彦氏による「地球のステージ」を開催して、ウクライナやパレスチナ情勢についての実際や支援活動の意義について、知ることができた。本単元は、指導者が学んできたラオス共和国における支援の在り方について、フォトランゲージを取り入れてグループで対話的に学びながら、日本が進めている国際支援の在り方や今後の展望について考えていく授業を構築する。学習の事前と事後に実態調査を行い、生徒の変容について追跡していく。

6. 単元計画(全10時間) <1年生>				
時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	調べ学習の計画を立てよう ゴールボールと山口選手の実績について調べよう	パラスポーツについて知り、調べ学習の計画を立てる。	<ul style="list-style-type: none"> ・パラスポーツについての実態調査を行う。 ・パラスポーツに関する動画を見る。 ・興味のあるパラスポーツを決め、調べ学習の計画を立てる。 ・スライドの作成方法を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前アンケート ・NHK for School「アニ×パラ」
2	ゴールボールと山口選手の実績について調べよう	市内出身で東京パラリンピック選手の山口凌河選手の実績について理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴールボールの動画を見る。 ・インターネットで山口選手の実績を調べる。 	・NHK for School「ブレーカーズ」
3 4	山口凌河選手講演会	ゴールボールやアイマスク体験を通して、パラスポーツの楽しさや実際に視覚に障害がある状況を理解する。	<p><山口凌河選手講演会></p> <ul style="list-style-type: none"> ・山口選手が、いつ目が見えなくなったのか、ゴールボールをなぜ始めたのか、これからの目標などについて講演を通して聞く。 ・アイマスクをつけて、クラスで1つの輪になる。 ・ゴールボールを体験する。 	・実施計画書
5	講演会を振りかえり、調べ学習の見通しを立てよう	講演会を通して、パラスポーツの意義について考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・山口選手へメッセージを書く。 ・ゴールボールの動画を見る。 ・スライドの作成方法を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事後アンケート ・NHK for School「ブレーカーズ」
6 7 8	パラスポーツについてスライドにまとめよう	パラスポーツについて調べ、パラスポーツの意義や障害のある方の想いを知ることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・調べた内容をスライドでまとめる。 	・スライド
9 [本時]	ラオスで障害者支援をしている中村さんの活動について理解しよう。	なぜ、中村さんは海外で障害者支援をしているのかを知ることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・作成したスライドをグループ内で発表する。 ・ADDP(アジアの障害者活動を支援する会)の中村さんとパラリンピック選手であるケン・テップティーダさんから話を聞く。 ・中村さんやケン選手に質問をする。 ・聞いた内容をスライドにまとめる。 ・中村さんへメッセージを書く。 	・事後アンケート
10	地球のステージ	地球のステージを鑑賞して、国際支援の在り方を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・国際医療支援活動をしている桑山紀彦氏による「地球のステージ」を鑑賞する。 	
<3年生>				
時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	国際支援の概要について知ろう。	開発途上国の支援のため、日本などの先進国や国際連合、JICA、NGOなど様々な機関があることを知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書を参考にして、国際連合の組織やODAの役割などについて調べる。 ・ウクライナやパレスチナに関する動画ニュースを見る。 ・UNHCRの動画を見て、難民について知る。 ・事前アンケート行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前アンケート ・UNHCRの動画

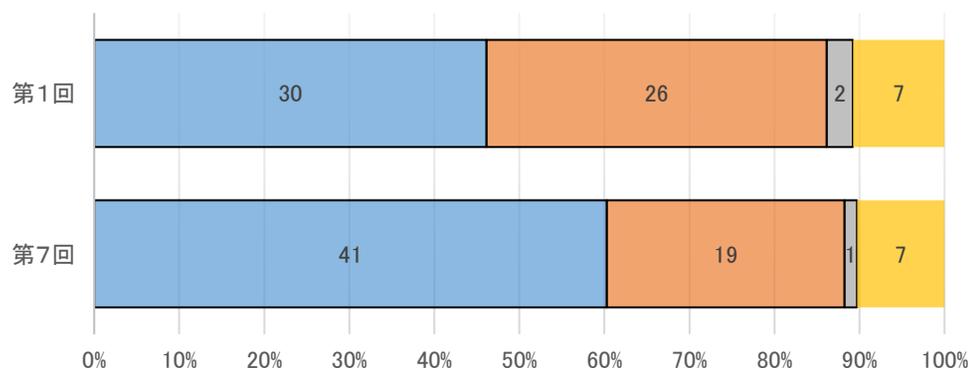
2	開発途上国とスポーツの関連について知ろう。	ボールやラケットなど部活動や体育祭で使用する用具が、開発途上国で生産されていることを知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ用品メーカーの冊子を見て、気がついたことを話し合う。 ・ラオスの剣道武具工場の動画を視聴する。 ・学校の体操着や上履きがどこで生産されているか確認する。 ・ラオスでは、生徒とほぼ同じ年齢の人達が働いていることを知ることで、開発途上国の助けがなければ、スポーツができないことを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ用品メーカーの冊子 ・動画（ラオスで撮影した剣道武具工場の様子）
3	日本に来ている外国の方と交流をしよう。	JICAの役割や日本に来ている留学生の存在を知ること、国際支援の在り方を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・英語で日本の文化や特色を紹介する。 ・JICAに研修に来ている留学生と一緒に折り鶴をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・JICA「研修員の学校訪問」
4	なぜ、ラオスには義足で生活している人が多いのだろうか。	ラオスでは、過去ベトナム戦争により、不発弾や地雷が多く残っていることを知り、義足をつくるために日本人が支援していることを理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・COPE ビジターセンターに展示してある義足の写真を使って、グループでフォトランゲージを行う。 ・各グループで意見を発表する。 ・各自タブレットを使って、ラオスと義足との関連について調べる。 ・ADDP 中村さんの動画を見て、障害者支援の在り方について知る。 ・事後アンケートを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・COPE ビジターセンターの写真 ・ADDP 中村さんの動画（ラオスの「みんなのカフェ」で撮影したもの） ・事後アンケート
56	地球のステージ	地球のステージを鑑賞して、国際支援の在り方を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・国際医療支援活動をしている桑山紀彦氏による「地球のステージ」を鑑賞する。 	
7	ラオスで昆虫食が食べられている理由を考えてみよう。	昆虫食を通じて、ラオスの人々の生活を改善しようとしている活動があることを知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・昆虫食の写真を使って、グループでフォトランゲージを行う。 ・各グループで意見を発表する。 ・各自タブレットを使って、なぜラオスでは昆虫食を養殖しているのか調べる。 ・動画を視聴する。 ・実態調査を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昆虫食の写真 ・昆虫食を試食した動画（授業者が実際に試食した動画） ・ラオスの朝市の動画 ・事後アンケート

7. 本時の展開(1年生:9時間目) 本時のねらい:ラオスのパラリンピック選手や選手を支援している方の話を聞いて、パラスポーツの意義や障害者福祉が世界共通の施策であることを理解できる。			
過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動 ・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料(教材)
導入 5分	1 本時の学習課題を知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> パラスポーツ選手や選手を支援する人たちは、どのような想いで活動に取り組んでいるのだろうか。 </div>	・本時の流れを黒板に書いておく。	・指導者作成のスライド【資料2】
展開 30分	2 パラスポーツについて発表する。 ・各自作成したスライドをグループ内で発表する。 3 ADDP(アジアの障害者活動を支援する会)の中村さんとケン選手から話を聞く。 ・中村さんの活動の話 ・ケン選手の競技にかける思い ・生徒からの質問	・発表時間は各自2分程度で、タブレットを見せながら行う。 ・中村さんは東京から、ケン選手はラオスからオンラインでつなぐ。 ・中村さんの活動だけでなく、なぜ支援活動をしているのか、また選手達がどのような思いでパラスポーツに取り組んでいるかを気付かせる。	・生徒作成のスライド【資料1】
まとめ 15分	4 中村さんやケン選手から聞いた話をスライドにまとめる。 5 本時で学んだことを振り返る。 ・中村さんへのメッセージを書く。 ・事後アンケートを行う。	・ワークシートに記述を参考にして、まとめさせる。	・ワークシート
8. 評価規準に基づく本時の評価方法 ・パラスポーツの意義や障害者福祉が世界共通の施策であることを理解している。 (ワークシート、スライド、事後アンケート)			
9. 学習方法及び外部との連携 <1年生・3年生> 地球のステージ 桑山紀彦氏 日本の心療内科医で、特定非営利活動法人「地球のステージ」の代表理事を務めている。パレスチナやアジア各国の医療支援活動に従事した経験がある。今年もトルコ地震やウクライナ紛争、パレスチナ紛争など中心に活動を行っている。国内、国外の自然災害や紛争、飢餓などによる支援活動の重要性を音楽と語りを変えながら訴える「地球のステージ」を全国の学校を中心に行っている。 <1年生> 東京パラリンピックゴールボール代表 山口凌河氏 取手市出身で視覚障害をもつパラリンピック選手である。中学2年生まで野球部の主将として活躍していたが、突然レーベル病を発症し、失明してしまう。その後茨城県立聾学校、東洋大学を経て、関彰商事に入社。東京パラリンピックではゴールボール選手として活躍する。中学校2年生で発症したことや地元出身ということで、生徒にとって、貴重な講演である。 ADDP アジアの障害者活動を支援する会 中村由希氏 ADDP は、障害者のスポーツ振興を通して、障害者支援に携わる NGO である。中村さんはラオスで「みんなのカフェ」を経営して、障害者の方の社会的自立を目指している。今回はオンラインで中村さんとラオスのパラリンピック選手であるケン選手との交流が実現できた。 <3年生>			

<p>JICA 研修員の学校訪問</p> <p>国際理解教育の一環として JICA 筑波が主催しているプログラム。アフリカやアジアの研修員が学校を訪問して生徒と交流をする。実際にはじめてアフリカ系の外国人と話す生徒も多く、貴重な機会となった。英語科と連携をして進めることができるプログラムである。</p>
<p>10. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1学年の授業では、茨城県教育委員会より依頼があり公開授業を実施した。2024年1月発行の「教育いばらき」に掲載予定である。 ・教育実習生や若手教員を対象に授業を公開した。 ・英語科の教員と連携をして、教科等横断的な単元計画を構想した。 ・「地球のステージ」を3年連続実施している。生徒達は国際支援の意義を感じる事ができた。 ・今後、授業者が大学院や論文等での発表を予定している。

【自己評価】

11. 苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・通常のカリキュラムの中に、国際理解教育の授業を入れるのは時間的には厳しいと感じた。 ・情報が多すぎて、どのようにして授業に落とし込んでいくのが難しかった。 ・教職員の間でも、国際理解教育に対する温度差があることは否めない。 ・1学年と3学年で実践したが、知識量が豊富な3年生の方が、当然ながら深い学びができた。事前にある程度の知識がないと、ラオスだけの紹介になってしまう危険がある。 ・突然の異動となり、実践が途中になってしまったことは残念であった。
12. 改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・ラオスに同行したほかの先生や学校との交流授業を実現したい。 ・JICAをはじめとした、外部人材や外部機関との連携が大切だと思う。JICAの国際理解教育プログラムを効果的に活用していきたい。
13. 成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・授業と学校行事(地球のステージや防災教室など)と関連付けることで、国際理解教育だけでなく、防災教育や福祉教育にも関心をもたせることができた。 ・ラオスという生徒からは馴染みの薄い国だからこそ、生徒は興味をもって取り組むことができたと考える。実際に行って撮影した動画や写真は非常に効果的であった。 ・現地で知り合った方や JICA と連携をすることで、充実した国際理解教育を実施することができた。
14. 学びの軌跡(児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<p><第3学年></p> <p>第4時事後アンケート</p> <p>「今回の授業で戦争が終結した後も、たくさんの方が苦しんでいることを理解できましたか」</p> <p>理解できた 67名 おおよそ理解できた 7名</p> <p>あまり理解できなかった 0名 理解できなかった 0名</p> <p>「開発途上国の生活を豊かにするためには、日本などの先進国の協力が必要なことが理解できましたか」</p> <p>理解できた 60名 おおよそ理解できた 14名</p> <p>あまり理解できなかった 0名 理解できなかった 0名</p> <p>ラオスの義足と不発弾についての授業後のアンケートである。生徒達はベトナム戦争の傷跡がラオスにまで及んでいることや、現在でも不発弾でなくなっている方がいることを知って驚きを隠せなかった。また義足の作成や医療活動に日本が深く関わっていることを知ることで、国際支援の重要性を認識することができた。</p> <p>第1時と第7時のアンケートの比較</p> <p>「日本はこれからも開発途上国へ支援を続けるべきですか」</p>



- 今後も日本は積極的に支援をするべきである。
- 国内の問題に重点を置いて、少しずつ海外への支援を減らしていくべきである。
- 国内の問題に集中して、海外への支援をなくすべきである。
- わからない。どちらともいえない。

第1回と比較して、「今後も積極的に支援をするべきである」と回答した生徒が30名から41名に増加した。これは第1回で「国内の問題に重点を置いて、少しずつ海外への支援を減らしていくべきである」と考えていた生徒が、授業を通して海外支援の重要性をより認識することができた結果と考えられる。海外支援の大切さは分かっているながらも、国内の問題を優先するべきであると考えている生徒は多く、このように考えている生徒に対して、どのような授業をして意識を変えさせていくかが、ポイントである。海外への支援が、いずれは日本の豊かさにつながることを理解させることが大切であろう。スポーツ用品が海外で生産されていること、食料供給を外国に頼っていることなど、身近な問題を取り上げて授業を展開することで関心が高まると考えられる。

<今後も日本は積極的に支援をするべきであると回答した生徒の記述から>
 国内の情勢によって支援されない地域があることを知って、第三国が支援することの大切さを学ぶことができたから。また、過酷な地域でも誰かが治療、物資の支援をしなければ現地の人には本当に苦しくなってしまうということが分かり、日本をはじめとする先進国の支援が重要であると分かったから。
 戦争とかほかの国から攻撃されている国がたくさんあると思うので、そういう人たちに他国である日本が支援してあげれば、その人たちにとってとても励みになると思うし、生きる希望を持たせてあげられると思うから。
 ウクライナとロシアの戦争やガザ地区の戦争だったりのことはニュースなどで知っていたけどその場にいた人たち状況だったり様子をより現実みを帯びて知ることができたと、その国民は何もしていないのに攻め込まれてもし自分がその状況の中にいたとしたら耐えられないと思ったからです。
 地球のステージから今世界で起きている戦争の現状や支援の重要さや大切さを学びました。ラオスについての授業から伝統の食文化から見いだすビジネスの可能性などがあることが分かりました。今後も日本は世界の国々と助け合っていくべきだと思います。

<第1学年 第9時事後アンケートの自由記述から>
 こういった素晴らしい活動は思っても行動できないので中村さんたちの勇気ある行動がとても素敵でした。ケンさんも体の障害というものに対してネガティブにならずに向き合っていて、それもパラスポーツで生かしていて本当に尊敬します。他にもみんなのカフェで働いているスタッフ様方もいろいろなみんな違う障害を持っているけれど、これからも頑張ってください。私も近い将来、直接的ではないかもしれませんが、大人として向き合っていきます。
 中村さん、ケンさんお話ありがとうございました。総合的な学習の時間でも日本の福祉について学習はしましたが、外国、しかも発展途上国で福祉にかかわっている中村さん方の話を聞いて、たくさんなるほど！と思いました。中村さんがおっしゃっていた『工夫をすれば共生が出来る』という言葉聞いてすごいなと思いました。これからの、ADDPの活躍に期待しています。頑張ってください！

15. 授業者による自由記述

- ・一人の授業者だけの実践では、広がりに限界がある。国際理解協力に関心のある職員と共に進めていくと、いろいろな視点から授業が実践できて、深い学びにつながるのではないか。
- ・ラオスに行って一番の成果は、外国で活躍している方とのつながりを築くことができたことである。今はオンラインで授業も可能で、名刺を交換したり、帰国後すぐにメールを送ったりすることで、帰国後の授業に生かされるはずである。
- ・ラオスの授業をやるのではなく、ラオスを通じて国際理解教育を進めていくことが大切である。普段の授業の内容とラオスで得た経験や知識が、どのように関連しているのかを考えて、授業を構想すると思う。

参考資料1: 1年生が作成したスライドの一部

The charm of Wheelchair basketball

車いすバスケットボールの魅力

1年1組



1.車いすバスケットボールとは

使用するゴールの高さなどは一般のバスケットボールと同じ3.05mで、激しい攻防やスピーディーなパスワークが魅力。



3.車いすバスケットボールの見どころ

クラス分け

障がいの重い人は1点、障がいの軽い人は4.5点と選手一人一人に持ち点と言われる点数が与えられ、コート上の5人の選手の持ち点合計が14点以内にならないといけない。(健常者は4.5点)

それぞれの持ち点の組み合わせによるチーム構成(戦略)がある。

持ち点	障害の程度
1.0	重度 ↑ 軽度
1.5	
2.0	
2.5	
3.0	
3.5	
4.0	
4.5	

トラベリング ダブルドリブルが適用されない クラス分け

5.感想

- ・改めて、車いすバスケットボール、そしてパラリンピックや障害者の大変さを知ることができた。
- ・今後、車いすの方などを見つけた場合は、負担がかからないように手伝えることなどから手伝えていきたい。



参考資料2: 授業で使ったスライド

共生社会の実現に向けて
～ADDP中村さんとのオンライン授業～

パラスポーツ選手や選手を支援する人たちは、どのような想いで活動に取り組んでいるのだろうか

6月6日
福祉キャラバン

- ・お年寄りとの接し方
- ・福祉の仕事のやりがい



福祉新聞の作成

介助犬について
難聴について
手話について
認知症について



パラスポーツの調べ学習

- ・NHK動画の視聴
- ・スライドの作成



ADDP



ミーティングID: 985 2850 0242
パスワード: 8888

9月13日
山口凌河選手講演会

- アイマスク体験
- ゴールボール体験
- ゴールボールにかける熱い思い

